

## 舞踊学会第22回定例研究会報告

例会企画 講演とパフォーマンス

### 「身体文化としてのオリンピック・パラリンピックとダンス」

#### 《テーマ設定の趣旨》

2020年開催の東京オリンピック・パラリンピックを3年後に控えた現在、スポーツへの関心の高まりとともに、人々のスポーツへの関わり方も「する・見る・支える・知る」と多様になり、同時に、スポーツに関連する様々なジャンルにおいて新たなムーブメントや教育の広がりを見せています。

そもそも文化の祭典として始まったオリンピックは、古くはスポーツだけでなく芸術の競技があったとされ、スポーツと芸術は密接に関連し、同じ源流の中にあったということです。現代のオリンピックにおいても、その源流は文化プログラムとして引き継がれています。とりわけスポーツと同様に身体文化であり、身体を介したパフォーマンスであるダンスは、文化プログラムの中でも注目されています。昨年リオで開催されたパラリンピックの閉会式では、次期開催国の東京から世界に発信されたダンスパフォーマンス、様々な障がいを持つダンサーたちによるパフォーマンスが大きな話題となりました。2020東京に向けて、今様々な場所で文化プログラムの一つとしてのダンスが披露されています。

今回の例会企画では、このような状況にあって、身体文化としてのオリンピック・パラリンピックに注目し、本テーマにふさわしい演者の方々にここにお招きして、贅沢な企画が実現いたしました。

最初の講演では、我が国のオリンピック研究の第一人者であり、様々なオリンピックムーブメントの中心で今まさに大活躍されている筑波大学の真田久先生に「オリンピックとアート—古代及び近現代を通して—」と題してご講演いただきます。

続いて、リオでのパラリンピックの閉会式にも出演され、現在オリンピックの文化プログラムの活動でも活躍の車いすダンサーの神原健太さんによるソロパフォーマンス、神原さんとそのお仲間である鵜田光晴さんと齊藤コンさんの3人ユニットによるパフォーマンスを披露していただき、その後には、昨年のリオのパラリンピックの閉会式でのダンスの映像を見ながら神原さんにその裏話などを紹介していただきます。

最後に、演者の4名の方々に再登場していただき、進行役の村田を交えてのトークとフロアとのやり取りを通して、改めて今回のテーマに迫っていききたいと思います。

(文責：村田芳子)



講演「オリンピックとアート」：真田久（筑波大学）



パフォーマンスと映像・トーク：  
神原健太（車いすダンサー）＋鵜田光晴，齊藤コン



リオパラリンピック閉会式の映像と神原さんのトーク